

5 学生の受け入れ

進捗状況報告

【5.0.1】 【5.0.2】 【5.0.3】

幅広い視野から入学者の選抜を行い、2006年度入試より全学科で1月、3月大学入試センター利用入試を始め、2006年度32名、2007年度28名の入学者を確保した。さらに、2007年度入試ではセンター併用型入試も始め11名の入学者を得た。これらの施策は、総受験者数の減少傾向に対する歯止めとなったが、多様性の確保を目指した各種入試入学者比率を増やすことには逆行している。

これに対して推薦入学者の追跡調査などに基づいて指定校推薦の応募資格が高校の実情に即したものとなるように基準の引き下げを行った。その結果、2006年度の54名から2007年度は101名まで入学者が増加した。2007年度入試では、大学入試センター利用入試と指定校推薦による入学者が相殺したため、一般入試以外の入学者の比率は、33%（2006年度入試では、23%）まで上昇し、目標値である40%に近づいた。

高大連携については、高等部理工学入門、啓明学院高校土曜講座、高校生対象オープンラボ、出張講義等を行っているが、参加人数が限られており実質的な入学者確保にはつながっていない。

【5.0.5】

AO入試については、第三者推薦書、活動実績報告書の廃止、推薦との受験日程の分離、広報活動の充実を図ったが、2006年度7名、2007年度6名の入学者を確保できたに留まり、AO入試の枠拡大は難しい状況にある。

【5.0.7】

入学者確保に関連した高大連携では、上述した推薦校の見直し、進学説明の機会を利用した積極的な広報活動に加えて、ホームページを全面的にリニューアルし迅速な情報提供を行っている。また、従来の高等部に加えて、継続校、提携校、協定校を新たに位置づけ、受験生の安定的確保を目指しているが、これまでのところその効果は現れていない。今後学年進行に伴ってこれらの施策の効果が現れることが期待されるが、私学理系への進学の動機付けが明確になされないと志願者増は困難な状況であると思われる。

【5.0.9】

科目等履修生、聴講生の受け入れについては、特に変化はない。

【5.0.12】

数は少ないが文系へ進路変更する者が現れて来ているのが最近の傾向である。これは入学者の中に必ずしも理系に向いていない学生が増加していることを窺わせる。不適合の学生への進路指導に担任制度は一定の役割を果たしているが、大学内の教職員間の連携はまだ十分組織化されていない。一教員では対応できないことも増えており、問題を抱えた学生へのケアをさらに充実していくことが望まれる。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

学部執行部メンバーが継続校を訪問し、各学科の説明をするなど積極的に高校に働きかけている。提携校についても2007年度より訪問する予定である。

学内第三者評価

入試の多様化を図り、推薦入試の拡充を行って、一般入試以外の合格者の比率が目標の40%に近づいていることは評価できる。しかしなお、AO入試の定員確保や継続校、提携校、協定校への働きかけによる入学者の拡大については課題が残されている。

なお、特別委員からは以下の意見があった。
・高大連携には入学者確保といった量的な効果だけではなく、むしろ質的な効果について認識すべきだと考える。